



離脱としての音楽

『アヴァン・ミュージック・ガイド』（枯淡苑、1999）のコンピュータ音楽の章で読んだ「『勝手に』やる人」という三輪さんの一言が印象に残る。組織に属さず自力で（コンピュータ）音楽をする人という意味だが、もっとも同書の登場人物の多くが「勝手に」やった人たちだ。パーソナルコンピュータ（PC）とはまさにそのための道具だし、当時真に受けた私は以後四半世紀近く「勝手に」やっている。問題は、PCなるものが要は事務用品であり、別の修練を要すると言えなくもないが、凡そ楽器とは似ても似つかぬ代物であるということで、そのためかどうか近年ますます「音楽がわからない」ような気がする。

私見では、三輪さんの音楽は音楽の外部を指し示す。外部を持つ音楽それ自体が稀だし、多くの音楽は音楽自身についてしか語らないように思う。奉納とは外部への眼差しだが、三輪さんが奉納と言うからには、我々以外の、恐らくは未知の存在に向かって作品は捧げられる。とはいえ「我々」もどれほど既知なのか。人が神経学的に多様ならば人の数だけ異なる音楽が存在し得る。「インディオたちは旋律に興味がない。旋律は彼らを退屈させる」（ル・クレジオ『悪魔祓い』高山鉄男訳、岩波書店、2010）。いかなる音楽も聴けばわかるというのは「話せばわかる」並みの驕慢に他ならない。その思い込みが、例えば「話してもわかり合えない『敵』」を作り出すのではないか。

わかるとは何か。わかろうとして失敗し続けることが前提であるのは言うまでもない。白状すると、私にとって三輪さんの音楽ほど一聴してわからないものはないのだが、そのこと自体が「何でもわかると思うなよ」という戒めであると認識し、都度わからなさを噛み締めるのだった。わからないから音楽に取り組むのであって、音楽とは何か、既にわかっているなら他の誰かに任せておけばよい。既知を繰り返す時間は残り少ない。

池田 拓実 いけだ たくみ（コンピュータ音楽家/作曲家）